

憶良と道真

今 泉 晴 行

OKURA&MITIZANE

IMAIZUMI , Haruyuki

はじめに

憶良は遣唐使に選ばれるような儒仏の深い学識を具えながら、四十歳を過ぎるまで無位で官途に就いた形跡はない。また七十歳過ぎまで地方勤めで、従五位下。これに比して道真は二十六歳で方略試に及第し、駆け昇るように階梯を上っていった。従五位下になったのは三十歳の時である。対蹠的な兩人であるが、両者ともに日本の歌人が看過した稀有な題材を口の端に上らせた。それは喪った我が子への哀惜の情である。日本の詩人たちが殆ど取り上げなかった身辺生活の实事を詠った。とりわけ《貧しいもの》、《小さいもの》、《弱いもの》を愛しむ視線をみせる。

憶良の名高い「貧窮問答歌」に比して、道真は「寒早十首」を持っている。加藤周一氏は語る。「『貧窮問答歌』の歌は、直接に、晋の東哲の『貧家賦』を踏まえる。しかしそのことはわが憶良の独創性を妨げない」（註1）、また、「貧を主題とする作品には、中国にも漢の揚雄の『逐貧の賦』、晋の東哲の『貧家の賦』、詩には宋の陶淵明の『貧士の詩』（以上、『芸文類聚』）」（註2）などがみられる。さらに「貧窮問答歌」と「寒早十首」、両著に関して、滝沢氏は「道真が憶良を真似たものとは考えられない。唐若しくはそれ以前の漢魏六朝時代に、分憂の職に在る者は、民苦を察したこの種の詩歌を作るという慣例に従ってこの詩歌をよんだものに相違いない」（註3）と記す。いづれにしても大陸からの刺激が考えられる。しかし、それは加藤氏も述べるように、憶良の、そして道真の独創を曇らせるものではない。

I. 憶良

「男子、名古日を恋ひし歌三首 長一首、短二首」
 世の人の 貴び願ふ 七草の 宝も我は 何せむに
 我が中の 生まれ出でたる 白玉の わが子古日は
 明星の 明るる朝は しきたへの 床の辺去らず 立てれども
 居れども とともに戯れ 夕星の 夕になれば いざ寝よと

手を携はり 父母も うへはなさがり さきくさの 中にを寝むと
 愛しく しが語らへば いつしかも 人となり出でて 悪しけくも
 善けくも見むと 大船の 思ひ頼むに 思はぬに 横しま風の
 にふふかに 覆ひ来ぬれば せむすべの たどきを知らに 白たへの
 たすきを掛け まそ鏡 手に取り持ちて 天つ神 仰ぎ乞ひ禱み
 国つ神 伏してぬかつき かからずも かかりも 神のまにまにと
 立ちあざり 我乞ひ禱めど しましくも 良けくはなしに やくやくと
 かたちつくほり 朝な朝な 言ふこと止み たまきはる 命絶えぬれ
 立ち躍り 足すり叫び 伏し拝み 胸打ち嘆き 手に持てる
 我が子飛ばしつ 世の中の道

反歌

若ければ道行き知らじ賂はせむ下への使ひ負ひて通らせ

布施置きて我は乞ひ禱むあざむかず直に率行きて天路知らしめ

これはわが子を亡くした哀切な詠唱である。現代でもみられる子煩悩な父親の姿である。父の希い、祈りにもかかわらず、我が子「古日」は次第にもの言うこともなくなり、顔貌も変わり呼吸も絶え絶えになり、やがて事切れ、生命も絶えてしまった。この状況を眼の当たりにした《父》は、凝っとしていることができず、跳び上がり、地団駄踏んで悔しがり、伏し拝み、我が胸を叩いて泣き叫び、腕に抱いていた我が子を飛ばしてしまった。これは哀しみが尋常ではなかった所為だけではなく、白川静氏も記しているが、日本列島に生き死にするひとにみられる感情表出の在り方とは懸絶したものが感じられる。

また、巻五にある「子等を思ふ歌一首并せて序」をみていこう。

釈迦如来、金口に正しく「等しく衆生をおもふこと、羅睺羅の如し」と説きたまひ、
 また「愛すること子に過ぐることなし」と説きたまひ、
 至極の大聖すら、尚し子を愛する心有り。況や、世間の蒼生、誰か子を愛せざらめや。

802 瓜食めば 子ども思ほゆ 栗食めば まして偲はゆ いづくより
 来たりものそ まなかひに もとなかかりて 安眠しなさぬ

803 銀も金も何せむに優れる宝子にしかめやも

よく知られた歌であるが、斎藤茂吉氏が記しているように「簡潔で飽くまで実事を歌い、恐らく歌全体が憶良の正体と合致したもの」（註4）であり、仏典に造詣が深いのがよく窺われる詠唱である。また憶良には「日本挽歌」（萬葉集 巻五 794）があり、序が附けられているが、本文中の序同様に高邁な仏教思想が語られている。「万葉集二十巻を通じて、仏教思想の基本構造がこのように明示されている例は他にない」（註5）。

これに反し実際みづからが今際の床にある時に、遺さざるを得なかった《児》に対する憶良の想いをみていく。

「老身に病を重ね、年を経て辛苦して、児等を思ふに及びし歌七種 長一首、短六首」
 たまきはる うちの限りは 瞻（せん）浮州の人の寿（よはひ）一百二十年なることを謂ふ
 平らけく 安くもあらむを 事もなく 喪なくもあらむを 世の中の
 憂けく辛けく いとのきて 痛き瘡（きず）には 辛塩を 注くちふがごとく
 ますますも 重き馬荷に 表荷打つと いふことのごと 老いにてある
 我が身の上に 病をと 加へてあれば 昼はも 歎かひ暮らし
 夜はも 息づき明かし 年長く 病みし渡れば 月累ね
 憂へ吟ひ ことことは 死ななと思へど 五月蠅（さばへ）なす 騒ぐ子どもを
 打捨てては 死には知らず 見つつあれば 心は燃えぬ かにかくに
 思ひ煩ひ 音のみし泣かゆ

反歌

慰むる心はなしに雲隠り鳴き行く鳥の音のみし泣かゆ

すべもなく苦しくあれば出で走り去ななと思へど此らに障りぬ

富人の家の子どもの着る身なみ腐し捨つらむ絁綿らはも

荒たへの布衣をだに着せがてにかくや歎かむせむせむすべをなみ

水沫なすもろき命も栲繩の千尋にもがと願ひ暮らしつ

倭文たまき数にもあらぬ身にはあれど千年にもがと思ほゆるかも

「是時年七十有四。鬢髮斑白いして」「ただに老いたるのみにあらず、またこの病を加ふ」（沈痾自哀文）状況に於いて思うのはやはり《児》のこと、末期の苦しみに堪えきれず、逃げ出したい想いを引き留めるのは、やはり《児》。反歌三、四で「富人の家の子ども」と自分の子どもの着衣の比較を揚げ、そして、《児》故に、「千尋」「千年」も生きていたいと祈念する。比するものさえなく懸け替えのない《児》を喪うことほど、哀切きわまりないことはなかった。

憶良は「筑前守」、「いまの福岡県知事くらいの役」（註6）であり、さほど貧窮の状態にはなかったのではないかともいわれる。しかし、現在の状況は別にして、四十歳過ぎに記録に載るようになるまではどのように生きていたのかは、誰も知らない。「伝統的な門閥での貴族」、「貴族的享楽の世界」（註7）への心理的反発も抱えていたのかもしれない。

それはこういうところにもあらわれている。巻五「貧窮問答歌」の直前には、「敬みて熊凝の為にその志を述べし歌に和せし六首 序を并せたり」がある。

大伴君熊といふ者は、肥後国益城郡の人なり。年十八歳。天平三年六月十七日を以て、相撲の使の某の国司官位姓名の従人と為りて京都に参り向かふに、天たるや不幸、

路にありて疾を獲て、即安芸国佐伯郡高庭の駅家にして身故えにき。臨終の時に長歎息して曰く、「伝へ聞く、仮合の身は滅び易く、泡沫の命は駐まり難しといふことを。所以に千聖已に去りて、百賢留まらず。況や、凡愚の微しき者、何ぞよく逃れ避けむや。但し、我が老親、並びに菴室に在り。我を望みて時を違へば、必ず喪明の泣を到さむ。哀しきかも我が父、痛ましきかも我が母。一身の死の途に向かふことを患へず。唯し二親の生の苦に在ることを悲しむ。今日長く別れなば、何れの世にか観ゆること得む」といふ。乃ち歌六首を作りて死にき。その歌に曰く、

- 886 うちひさず 宮へ上ると たらちしや 母が手離れ 常知らぬ 国の奥かを 百恵山
越えて過ぎ行き いつしかも 都を見むと 思ひつつ 語らひをれど 己が身し
労はしければ 玉杵の 道の隈廻に 草手折り 柴取り敷きて 床じもの うち臥い伏して
思ひつつ 嘆き伏せらく 国にあらば 父取り見まし 家にあらば 母取り見まし 世の中は
かくのみならし 犬じもの 道に伏してや命過ぎらむ 一に云ふ「わが世過ぎなむ」
- 887 たらちしの母が目見ずておほほしくいづち向きてか我が別るらむ
- 888 常知らぬ道の長手をくれくれといかにか行かむ糧はなしに 一に云ふ「干飯はなしに」
- 889 家にありて母が取り見ば慰むる心はあらまし死なば死ぬとも 一に云ふ「後は死ぬとも」
- 890 出でて行きし日を数へつつ今日今日と我を待たすらむ父母らはも 一に云ふ「母が哀しき」
- 891 一世には二度見えぬ父母を置きてや長く我が別れなむ 一に云ふ「相別れなむ」

しかし肝心なことは、憶良自身が如何にあらうと、貧窮する者、淋しく異境で死んでいく者、幼き弱い者に向けるその視線が優しく暖かいことである。「この作は、彼にしばしば作例のある、他者になりかわって歌うスタイルのものである。この場合の他者とは、十八歳の若い身そらで行路病者となりあえなく死んだある実在の青年にほかならない。そのような若者の死という題材に関心を抱くこと自体、すでに憶良と言う詩人の個性を示しているということもいえる」（註8）。憶良は異土で果敢なくなる《他者の想い》を、自己の想いとすることができたということである。この点に関して大岡信氏は以下のように述べている。「人生の華やかな側面ではなく、暗い側面を歌ったという事実である。これは日本人が始めてぶつかった体系的な外来思想が、諸行無常を教える仏教やまた儒教であったという事実と切り離せないもので、憶良は最も尖端的な知識人のひとりとしてこれらの思想を吸収したが、その結果つくり出された彼の詩は、老年や死に対する強い関心をうたうものとなった（註9）」。

また「展開している死生観を読むたびに、病、老、死あるいは貧苦に対する絶望的な悲哀を述べつつある彼の気持ちの背後に、それら人生の暗黒な側面を可能なかぎりくっきりと対象化し、思惟の対象として前後左右から検討してみようと決意した新しいタイプの文学者が、古代日本でまさに始めて、誕生していたのではないかということを感じるのである」（註10）。様々に異論はあるようだが、白川静氏が指摘するように、憶良が「百済系」の「渡来人異郷人」（註11）であるとしたならば、仏教の素養からだけではない「人生の暗い面」を歌材として取り上げた、彼の性向も首肯できるかもしれない。さらに新

羅による百濟滅亡に直面した経験を心底に秘めているとしたら、滅亡の機に眼前に起きていることを眼のあたりにしながらただ見ているしかない事があることを知った人間は、物事を距離をもって見ることができることが考えられる。それは、憶良が「他の『万葉集』歌人の誰にもない自分自身への皮肉、一種の『黒い諧謔』に近い調子」を持つことも当然なのかもしれない。且つ「自分自身を含めての対象への知的な距離は、子どもや老人から『我よりも貧しき人』に致るまで、他の歌人には見えなかったものを憶良の眼には見えるようにさせたのであろう。」(註12)

その個人的な経験の蓄積、儒仏の素養、教養等が醸酵し、視点の多様性、特異性、また対象に対する距離、相対化など、憶良の個有性を形成してきたといえよう。「万葉の中で、もし社会詩的なものがあるとすれば、おそらくこの一篇（「貧窮問答歌」を指す著者挿入）をあげうるにすぎないのではないか」(註13)、また「社会詩は必然に政治詩を生み、また思想詩・道徳詩を生む」(註14)。しかし、現実の日本ではそれを生みだすことはなかった。

Ⅱ. 道真

道真が讃岐の守として、府内を巡視した折に見たことを纏めたものに「寒早十首」がある。国司として赴任後半歳余で作られている。都の貴族とは隔たる異郷の庶民の生活を眼前にして、道真に筆を執らせるものがそこにはあった。

寒早十首 同用人身 貧類四字

- | | | |
|-----|--|--|
| 200 | 何人寒氣早
寒早走道人
案戸無新口
尋名占舊身
地毛郷土瘦
天骨去來貧
不以慈悲繫
浮逃定可類 | 何れの人にか 寒氣早き
寒は早し 走り還る人
戸を案じても 新口無し
名を尋ねては 舊身を占ふ
地毛 郷土瘦せたり
天骨 去來貧し
慈悲を以て繫がざれば
浮逃 定めて類ならむ |
| 201 | 何人寒氣早
寒早浪來人
欲避逋租客
還爲招責身
鹿裘三尺弊
蝸舎一間貧
負子兼提婦
行、乞與類 | 何れの人にか 寒氣早き
寒は早し 浪かれ來 人
避けまく欲りして租を逋るる客は
還りて責めを招く身となる
鹿の裘 三尺の弊れ
蝸の舎 一間の貧しさ
子を負ひ 兼ねて婦を提る
行く行く 乞與類なり |
| 202 | 何人寒氣早
寒早老鰥人
轉枕雙開眼 | 何れの人にか 寒氣早き
寒は早し 老いたる鰥の人
枕を轉して 雙び開くる眼 |

低簷獨臥身	簷に低れて 獨り臥する身
病萌逾結悶	病ひ萌しては 逾 悶えを結ぶ
飢迫誰愁貧	飢ゑ迫りても 誰か貧しきを愁ふ
擁抱偏孤子	擁抱す 偏に孤なる子
通宵落涙頻	通宵 落涙頻

以下 略

いかなる人々の上に「寒」が早く厳しく覆い被さってくるか、境遇、職業、身分を十に分けて、庶民の生活の悲惨を詠んだものである。「走還人」は他国に逃散し捕捉され本貫に強制送還された人々、「浪來人」は徴税を逃れて流れ入ってきた人々、「老鰥人」は連れ合いを亡し幼いこどもを抱えた老いた独り身の男、「夙孤人」は早くに双親を失った孤児。「薬圃人」は病いに罹っても薬草一本さえ恣にできない薬草園の園丁、「驛亭人」は寒さに震えながらも単衣しか身に付けられず驛亭にはたらく馬子たちなど輸送に携わる人々、「賃船人」は寒風吹き荒ぶ海上で舟漕ぎに雇われている人々、「釣魚人」は陸地に生業を求めることあたわず租税を払うため魚釣りをするしか残された途がない人々、「売鹽人」は塩を煮て売り捌く零細の人々、「抹樵人」は木を切り運び出す人々たち、先ず寒風に身を晒すこのような人々の苦難を詠んでいる。

「これは平安時代の職人尽くしであり、貧窮問答歌」(註15)と「管家文章管家後集」の註に記されているように、採り上げたはたらく人々のすべては、「重税にあえぐ貧しい人々」(註16)として、この詩に詠まれている。

大岡信氏も記しているように、道真は彼らに租税を払わせる側であり、その管理督促する立場の役人である。その彼がこのように述べざるを得ないということは、その現実が余りにも凄絶であり、詩人としての彼の魂を揺り動かすものであったということであろう。また道真は詩人としての資質からか、その身分立場を越えて、その現実の有り様に憐情を示した記述をみせている。「道真はその意味では、ほとんど類例を見出せない役人であり、そしてまた詩人」(註16)であった。また「讃岐における民衆の過酷な生活実態を見てしまった以上、この詩人官僚は、高位の貴族たちの栄耀栄華の生活にひたり切ることはもはやできるはずありません」(註17)と述べられているように、道真の心柄気質は問民苦使の派遣検税使の派遣中止等々、彼の執った政策にも現れている。また、その資質は「管家後集」の中で大宰府の庶民を描くときにも散見できるものである。そして、道真は「叙情詩の世界を画期的に拡大した。庶民の飢えと寒さを詠ったのは、憶良の「貧窮問答歌」以後、平安時代を通してただ道真の詩集があるだけである」(註18)とすることができる。

つぎに、「夢阿満」をみていくことにする。

117 夢阿満

阿満亡來夜不眠	阿満亡にてよりこのかた 夜も眠らず
偶眠夢遇涕漣、	偶眠れば夢に遇ひて涕漣なり
身長去夏餘三尺	身の長 去にし夏は三尺に餘れり
齒立今春可七年	齒立ちて今の春は七年なるべし
従事請知人子道	事に従ひて 人の子の道を知らむことを請ふ

讀書諳誦帝京篇
初讀賓王古意篇
藥治沈痛纔旬日

風引遊魂是九泉
余後怨神兼怨佛
當初無地又無天
看吾兩膝多嘲弄
悼汝同胞共葬鮮
阿満已後 小弟次天

萊誕含珠悲老蚌
莊周委蛻泣寒蟬
那堪小妹呼名覓
難忍阿嬢滅性憐
始謂微々腸暫續
何因急々痛如煎
桑弧戸上加蓬矢
竹馬籬頭著葛鞭
庭駐戲栽花舊種
壁殘學點字傍邊
每思言笑雖如在
希見起居惣惘然
到處須彌迷百億
生時世界暗三千
南無觀自在菩薩
擁護吾兒坐大蓮

書を讀みて 帝京篇を諳誦したりき
初め賓王の古意篇を讀みたりき
藥の沈痛を治めること 纔に旬日
風の遊魂を引く 是れ九泉
余より後 神を怨み兼ねて佛を怨みたり
當初 地なくまた天もなかりき
吾が兩つの膝を看着嘲弄すること多し
悼まくは 汝が同胞の共に鮮せるを葬れることを
阿満已後 小き弟次いで天せるなり

萊誕は珠を含みて 老蚌を悲しびき
莊周は蛻を委めて寒蟬に泣けり
那んぞ堪へむ小妹の名を呼び覓むるに
忍び難し 阿嬢の性を滅して憐れぶに
始め謂へらく 微々として腸暫く續くといへりしに
何に因りてか 急々に痛むこと煎るがごとき
桑弧は戸の上 蓬矢を加ふ
竹馬は籬の頭 葛鞭を著く
庭には戲に花の舊き種を栽ゑしを駐めたり
壁には學して字の傍の邊に點ぜしを殘せり
言笑を思ふ毎に 在るが如くなれども
起居を見むことを希へば 惣べて惘然たり
到る處 須彌 百億に迷はむ
生るる時 世界 三千ぞ暗からめ
吾が兒を擁護して大きな蓮に坐させたまへ

阿満は固有名詞ではない。補注に據ると、「阿」は愛称、「満」は「麻呂」に通じるという。「我が息子」「我が坊主」という意であろう。「阿満」が壁に遺した落書を見る度に胸が塞がれる想いがする。その笑顔を思い出す毎に、ついその姿をさがしてしまうが、どこにも見いだすことはできないと、息子の死を悼んでいる。

また、「管家後集」には太宰府の地で道真が記した「秋夜」が収められている。

秋夜

床頭展轉夜深更
背壁微燈夢不成
早雁寒蛩聞一種
唯無童子讀書聲
童子小男幼字、近會夭亡

「深更まで机に頭を展転と幾度となく寝返りを打っても寝付けず、
燈を背にしても眠れず夢も見ることができない。

早々と訪れた雁、寒々と鳴く蚕（こおろぎ）は一様で常と変わりはない。

ただひとり幼き我が子が書を読む声だけが聞こえない。

附註に「童子は男の子の幼名愛称。近来夭亡した。」と記載。

来雁の声も、きりぎりすの寒さを思わせる鳴き声も、常と変わらないが、ただ我が幼い息子の書を読む声だけが聞こえない。幼い我が子への思いは深く、床に就いても眠れず、寝返りをくりかえすのみ、夢も結べない、と記す。

この「童子」は483「慰少男女」五言で「少男與少女 相隨得相語」と記されている男の子である。この詩では具体的に語られることはないが、幼くて生母から離れている「少男與少女」を不憫に思う心持ちがあらわれている。しかし、道真は子らを、お前たちには「暗きに臨みては燈燭あり 寒きに當りては綿絮有り」といたわり、

「往にし年 窮れる子を見たりき 京の中に迷いて據（よりどころ）を失へり

身を裸にして博奕する者 道路 南助と呼べり 南大納言の子 内蔵助 博徒なり。

今なほし号けて南助といいへり。

徒跣にして 琴を弾く者 閩卷 弁の御と稱（い）へり」

俗に貴女と謂ひて御と爲す。蓋し夫人御藤相公弁官を兼、故に其の女を稱へり。

とつづけ、さらに「汝を彼らに思量するに、天感 甚だしく寛恕なり」と慰める。

道真は、憶良と同様、《貧しい者》《弱い者》《小さい者》に対して特別の関心を示している。《貧しさ》の理由は問わない。ただ現実にはそういう状態にある者、そういう状況に置かれている者を掬い上げ、共感を滲ませている。彼らを見る両者の視線は優しく暖かい。

おわりに

道真も憶良も為政者の一隅にいたが、情念の顕れ方からいってもそのような位置にいる人間が示す情感のありかたとして、二人は特異な存在である。それぞれの時代から傑出しているといえよう。なぜそれが可能になったのか。憶良も道真も漢文学、儒仏等、大陸文学の素養には一方ならぬものを具えていた。漢詩文、また仏教等を究めることで当時の時代から卓越することができた。

加えて、両者とも《わが子の死》、我が子の不在、そして死そのものに対してまで、思念を高めていた。とりわけ我が子の《死》は、現代人の考える近代的自我、自己、個人という、自分のみと限定されたものではなく、曾祖父以来の学儒を嗣業として受け伝えていく、広義の「わたし」につながるものである。

それぞれの仏教理解に様々な意見があるが、みづからより若く、《わたし》を引き嗣ぐ者の死を眼のあたりにして、他者へのまなざしは一段と暖かさを増し、《仏教》を体得しその信仰が深まって行くと考えられる。

註

- 註1. 加藤周一 「日本文学史序説 上」 p.109 ちくま学芸文庫 筑摩書房
- 註2. 白川静 「後期万葉論」 p.187 中公文庫 中央公論新社
- 註3. 滝沢政次郎 「憶良の貧窮問答歌と管公の寒早十首」 日本歴史1982年1月号 第404
- 註4. 斉藤茂吉 「万葉秀歌」 上 p. 182 岩波新書 岩波書店
- 註5. 加藤周一 「日本文学史序説」 上 p.107 ちくま学芸文庫 筑摩書房
- 註6. 山本健吉・池田彌三郎 「萬葉百歌」 p.188 中公新書 中央公論社
- 註7. 西郷信綱 「日本古代文学史」 p.96 岩波書店
- 註8. 大岡信 「万葉集」 p.229 岩波書店
- 註9. 大岡信 「万葉集」 p.226 岩波書店
- 註10. 大岡信 「万葉集」 p.227 岩波書店
- 註11. 白川静 「後期万葉論」 p.163 中公文庫 中央公論新社
- 註12. 加藤周一 「日本文学史序説」 上 p.109 ちくま学芸文庫 筑摩書房
- 註13. 白川静 「後期万葉論」 p.191 中公文庫 中央公論新社
- 註14. 同上
- 註15. 川口久雄 桂注 「管家文集 管家後集」 p.259 岩波書店
- 註16. 大岡信 「日本の詩歌 その骨組と素肌」 p.35 岩波書店
- 註17. 同上 p.35～36 岩波書店
- 註18. 加藤周一 「日本文学史序説」 上 p.156 ちくま学芸文庫 筑摩書房

